フェアリーテイル～切り札の魔導士～

ヒートソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーテイル～切り札の魔導士～

【Ｎコード】

Ｎ３７１７Ｚ

【作者名】

ヒートソウル

【あらすじ】

記憶喪失となった少女は一人の女性に助けられる。その少女は成長し、ある魔導士ギルドに入る。そのギルドの名は、妖精の尻尾（フェアリーテイル）。

プロローグ（前書き）

ヒートソウルです。書きたかった仮面ライダー設定物を書いて見ました。

一作目は仮面ライダーブレイド×フェアリーテイルです。

プロローグ

???side

「お前さ、○○○を怪我させたんだよな！」

「最低！かわいそうだと思わないの！？」

……違うよ、……僕は何もしてない。

「こっち来んなよ！」

「キモいから話しかけないでくれる？」

「あんなことしてよくここにいられるよな、お前よ！」

……違うんだよ。

「君はね～、悪いことをしたんだよ！だからね、罰を受けるんだ！」

「立てよ！○○○が受けた痛みはこれより痛いんだよ！」

「やってない？嘘つけ！〇〇〇の腕にある怪我が証拠だ！」

……何で僕の話を聞いてくれないの？……あの怪我は、あの子が自分でやったんだよ。

「お前以外誰がやれるんだよ！」

「あれだけやっておいて、誰かに罪を擦り付けるの？」

「全部お前が悪いんだよ！」

……誰か、助けて。

「あなたをそんな子に育てた覚えはありません！」

「いいか！そこで反省していろ！寝たらぶっ飛ばすぞ！」

「家族がこうなったのは、全部お前のせいだ！」

……助けて。

「早く死ねよ！」

「お前に生きてる理由なんかあるわけないだろ！」

「死んだほうが、みんなのためになるんじゃないの？」

……助け……て。

「！！！！」

……さっきのは、何？……

……夢？

「……ここ、どこ？」

周りを見ると殺風景な部屋だった。

ガチャ。

「あ、やっと起きたわね。」

「……！！」

……誰かが入ってきた。

「倒れていたから私の家に連れてきたのだけれど、大丈夫？」

「……大丈夫。」

「そう、良かった。」

……優しい人、かな？

「そうだ！名前がまだだったわね。私はリリカ。リリカ・ローズウェルよ。君の名前は？」

……名前は、……あれ？

「……。」

「ん？どうしたの？」

「……分からない。」

「えっ？」

「……名前、……分からない。」

……私は、……誰？

？？？side out

プロローグ（後書き）

感想待ってます。誹謗中傷はなしでお願いします。

プロローグ2（前書き）

連続投稿です。

プロローグ2

リリカｓｉｄｅ

私はリリカ・ローズウェル。普段は近所の魔導士の店で働いているの。まあ、店の売り上げはそれなりにあるから助かっているんだけどね。

あの日も、いつも通りに仕事を終えて家に帰る途中だった。

「さてと、お腹空いたしさっさと帰りますか。」

今日は仕事を終えて、買い物をしたけど安かったし助かったわ。

私の家は店からちょっと距離があるのだけれど、部屋などは結構いいのよ。

「よし、見えてき……ん？」

私の家の近くには一本の木がある。何のへんてつもない普通の木。その根元に誰かが倒れている。

「……こ、子供！」

私はすぐに走りよった。その子供を見ると痣や怪我などはなかった。

「……脈はあるみたい。気絶しているだけね。」

何で子供が！？とにかく家にいれて、寝かせないと。

あの子を私のベットに寝かせ、買ってきた食材をまとめた。

（あの子の体には痣や怪我などはなかったけど、どうしてあそこにいたの？あの子から事情を聞くしかないわね。）

……ちょっと様子を見に行きますか。

ガチャ。

ドアを開けるとあの子が起き上がっていた。

「あ、やっと起きたわね。」

「……！！」

「倒れていたから私の家に連れてきたのだけれど、大丈夫？」

「……大丈夫。」

「そう、良かった。」

まあ、見た感じ怪我はしていないわね。

「そうだ！名前がまだだったわね。私はリリカ。リリカ・ローズウェルよ。君の名前は？」

「……。」

どうしたのかしら？

「ん？どうしたの？」

「……分からない。」

「えっ？」

「……名前、……分からない。」

……まさか、記憶喪失！？

「……じゃあ、君はいくつ？」

「……分からない。」
「お父さんかお母さんの名前は分かる？」
「……分からない。」
その後もいろいろと聞いてみたけれど、全部分からないらしい。……困ったわね。
「……ごめんなさい。」
「何で君が謝るの？」
「……悪いこと、したから。」
「あのね、記憶喪失は悪いことじゃないの。」
「……でも。」
「いいの、私は気にしていないから。」
「……うん。」
とりあえず、この子の名前を考えないと。名前がないと困るし。
「う～ん、名前って言われてもすぐには思いつかないのよね。」
この子、女の子みたいだし、女の子らしい名前を考えないとね。

う〜ん、……ん、これだ！

「よし！君はティオ。ティオ・ローズウェルで決まり！」

「……ティオ？」

「そう、今日から君はティオ・ローズウェル、私の妹よ。私のことはお姉ちゃんって呼んでね。」

「……お姉ちゃん？」

ティオが首をかしげた。……か、可愛い！！可愛過ぎるわ！！！

「ね、ねぇ。も、もう一回言ってくれる？」

「……お姉ちゃん。」

「もう一回！」

「……お姉ちゃん。」

「もっと言って！！」

「……お姉ちゃん。」

きゃーーーー！！！何！？この可愛さ！お持ち帰りよーーーー！！！

「……大丈夫？」

「だ、大丈夫よ。」

ハッ！駄目よ！もうお持ち帰りしているのだから！……

って違う違う。

ぐ～～～。

「……。」

ティオのお腹がなった。

「お腹すいた？」

「……うん。」

「じゃあ、作るから待っててね。」

「……うん！」

この日は私とティオが出会った特別な日になった。

リリカｓｉｄｅ　ｏｕｔ

新しい生活

ティオside

私はティオ、ティオ・ローズウェル。この名前は私のお姉ちゃんがつけてくれた名前。お姉ちゃんは優しくて、かっこいい。

……でも、そんなお姉ちゃんでもちょっと嫌なところもある。

「ねぇ、ティオ。今日はこれ着てみて。」

「これを？」

「そうよ！」

今私は、お姉ちゃんが働いている魔導士の店にいる。いろんな物がたくさんあった。私はこのお店のお手伝いをすることにした。

「……ねぇ、何でこれ？」

「何言ってるのよ。これがティオの可愛さが一番引き立つのよ！」

……何でこれを着なきゃいけないの？……

……フリルが沢山ついたメイド服。

「リリカ！あんた何やってんの！」

「そ、ソラさん！？わ、私は別に何もしてませんよ！？」

「してるでしょ！現在進行形で！！」

この人はソラさん。このお店の店長。ちなみに歳は……

……言えない。言ったら大変なことになる。

「……ティオちゃん。今すご～～～～く失礼なこと考えなかった？」

「か、考えてない。」

何で分かったの！？

「……まあ、別にいいわ。でも、ティオちゃんが来てくれて大助かりよ。店の売り上げが上がっているのだからね。」

「ソラさん。それはティオの可愛さのおかげですよ！私のコーディネートセンスでそれがさらに引き立って売り上げが上がるんですよ！！あぁん、もうこのままお持ち帰りしたいわ！！」

「……ティオちゃん。それを着たら店の前の掃除、お願いね。」

……着ることは決まっているんだ。

「はい。」

「掃除終わったよ。」

「ありがとう、ティオちゃん。」

「……あの、ソラさん。お姉ちゃんは？」

「リリカね、ならあそこに。」

私はソラさんの指をさした方を見た。

「次はこれかしら？いや、これも外せないわね。う～ん、小悪魔っぽくするのも悪くないわ。大人っぽくするのもいいし、あぁもう選べない！！」

……お姉ちゃん、その服どこから持ってきたの？

「あの、もう普通の服に着替えていい？」

「駄目！！絶対駄目！！」

「……リリカ、あんたねぇ。」

「だってぇ～、ティオが可愛いからいろんな格好させたんだもん！」

……お姉ちゃん、見てて何か痛い。

「リリカ、もう開店時間だからやめなさい！」

「……う～、ソラさんのケチ。」

「ケチで悪かったね。」

「お姉ちゃん、仕事はしようよ。」

「ティオに言われなくても分かってる！」

……このお店、大丈夫かな？

「二人とも、お疲れ様。」

「終わった～。」

「疲れた～。」

今日のお店の仕事が終わった。……やっと普通の服に着替えられる。

「私、着替えてくる。」

「えーーーー！！！着替えちゃうの！？まだ着てて！！出来ればそれを普段着にして！！」

「……リリカ、ちょっとこっちに来なさい。」

「えっ？ちょ、ちょっとソラさん？や、やめてくださいよーーーー！！！！」

お姉ちゃんがソラさんに引っ張られて奥の部屋に消えていった。……今のうちに着替えよう。

ティオside out

リリカside

ゴカン！！

「痛！！何するんですか！？」

「何もこうもないよ。少しは自重しなさい！！」

「嫌です！！」

だってティオが可愛いんだもん♪

「まったく、あんたは。やめなきゃ給料さげるよ！！」

「それも嫌です！」

給料は下げないで！むしろ上げて下さい！

「……とにかく、あれは少しは控えるんだよ。」

「は～い。」

「ところで、ティオちゃんについて何か分かったのかい？」

「……それが、何も分からないんです。」

「……ちゃんと聞いて回ったりしたんだろうね？」

「しましたよ！してないように見えましたか！？」

「見えるよ。」

即答ですか！？

「何で信用してくれないんですか～？」

「そりゃ、あれだけやれば信用もへったくれもないよ。」

「……そうですか。」

「まあ、とにかく明日もきちんと仕事はするんだよ。」

「喜んで！」

明日はティオに何を着せようかな～？

「ティオ、帰るよ！」

「うん！」

私はティオと手を繋いで店を出た。

「ねぇ、お姉ちゃん。」

「ん？どうしたの？」

「……ううん、何でもない。」

「ティオ、言いたいことがあるならはっきり言わなきゃ駄目だよ。」

「うん、……でも本当に何でもないから。」

「そう、ならいいけど。」

ティオはちょっと内気なところがあるけど、それがまたいいのよね！

「お姉ちゃん、明日も頑張ろうね。」

「明日は何を着る？」

「……。」

「もう、そんな顔しないでよ。」

不機嫌なティオも可愛い！よし、明日も着せるぞ！！

リリカｓｉｄｅ　ｏｕｔ

心の傷（前書き）

短いです。

心の傷

ティオｓｉｄｅ

「お前、ぶっ殺してやる！！」

「あんなことしたんだよね。これくらいで済むと思わないでよ。」

「こいつ、馬鹿だよな！」

……やめて。

「君は私の奴隷だよ！私の言うことはぜ～んぶ聞かなきゃダメだよ！」

「早くしろ！言うことが聞けないのか！？」

「これは君の罰だ。君は全ての罰を受けなければならないのさ！」

……罰？罰って何？

「！！！！」

私は夜中、目が覚めた。

「……また、あの夢？」

毎晩、何でこの夢ばかり見るんだろう？

「……ん～～、ティオ～～。」

私はお姉ちゃんと一緒に寝ている。さっきのはお姉ちゃんの寝言。

「……迷惑、……かけちゃ駄目だよね？」

……恐いけど我慢しよう。

「ティオ、ここ最近顔色悪いけど大丈夫？」

「……だ、大丈夫だよ。」

「大丈夫ならいいけど、無理はしちゃ駄目だよ。」

「……うん。」

……今日も頑張らないと。

ティオｓｉｄｅ　ｏｕｔ

リリカｓｉｄｅ

ティオ、大丈夫って言ってたけど本当に大丈夫かしら？

「リリカ、ティオちゃんの顔色が悪いけどどうかしたのかい？」

「……それが、ティオは大丈夫だって言い張るんですよ。」
「それじゃ駄目だ。ティオちゃんは何かを抱え込んでる。大変なことになる前に解消したほうがいいよ。」
「はい。」
ちゃんとティオから聞かないと駄目ね。
「とりあえず、ティオちゃんには無理をさせないようにね。」
「分かりました。」
さてと、ん？
「……。」
「ティオ、ボーっとしてるけどどうしたの？」
「……。」
「ティオ？」
「……あ、お姉ちゃん。ううん、何でもない。」
……絶対何かある。

夜

「ティオ、ちょっといい？」

「何？」

今聞かなきゃ取り返しのつかないことが起きる。

「ここ最近、顔色が悪いけど何かあったの？」

「……何でもないよ。」

「じゃあ、何で夜寝ている時うなされていたの？」

「……何で知ってるの？」

「やっぱりね。恐い夢でもみたの？」

「……うん。」

「どうして言ってくれなかったの？心配したのよ。」

「……お姉ちゃんに、……迷惑、かけたくなかった、から。」

私はその言葉を聞いた後、ティオを抱き締めた。

「……お姉ちゃん？」

「ティオ、駄目でしょ。つらいことがあったらちゃんと言わなきゃ。」

「……でも、……迷惑かかる。」

「そんなことはないよ。」

私はティオを安心させるために頭を撫でてあげた。

「……お姉ちゃん？」

「迷惑なんてかかってない。」

「……。」

「つらい事があったら、自分が信頼出来る人に言わなきゃ駄目だよ。一人で抱え込んでいたら、そのつらい事で自分が駄目になっちゃうからね。」

「……った。」

「えっ？」

「……ずっと、……ごわ、がった。」

「……泣きたかったら、泣いていいよ。」

「……あ、あ、う、うわぁーーーーーーーーーーん！！」

「……ティオ、少しはすっきりした？」

「……うん。」

「自分のペースでいいから、話してくれる？」

「……うん。」

私はティオの話を聞いた。ティオは自分が悪夢をみていたこと、それを毎晩みていたこと等いろいろ話してくれた。

「……ティオ、ごめんね。もっと早く聞いていれば苦しまずに済んだのに。」

「……お姉ちゃん、ありがとう。」

「……どういたしまして。そろそろ寝ようか？」

「……うん。」

リリカside out

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3717z/

フェアリーテイル〜切り札の魔導士〜

2011年12月18日07時45分発行